

経営のヒント54 韓非子

強者の管理学

韓非子』は、戦国時代の思想家韓非の著作である。

韓非子の内容の特徴を一言でいえば、人間不信の哲学の上に立って、権力のあり方を追求している点にある。人間の実態を見据えながら権力の本質を分析し、トップの置かれている困難な立場を浮き彫りにすることによって、権力維持の方策を探った本、それが『韓非子』である。

そういう意味では、トップやリーダーにとって、必ず一度は目を通しておかなければならない本だと言ってよいかもしれない。

『三国志』の諸葛孔明は、劉備亡き後、二代目劉禅を盛り立てて名宰相と仰がれた人物である。その孔明が、皇太子時代の劉禅に対して、繰り返し『韓非子』を読むように薦めている事実は注目されている。つまり孔明は若い二代目の帝王学を教え込むためのテキストとして使用したのだ。

曰く、『個人では論語、組織では韓非子』表は論語、裏は韓非子』

二つ揃って、すぐれたリーダーやトップの帝王学のバランスと言えようか。

現代のトップやリーダーにとって、組織管理の原理原則を学ぶには、必要不可欠な著書であろう。

周知のように、人間をどう見るか、むかしから二つの説があった。

孔子の性善説と韓非子の性悪説。

性悪説では、人間の本性は悪であるという立場に立っている。だから管理や締め付けをきびしくして対処しないととんでもないことになるぞ、人間関係にしてもそれなりの警戒心をもって対応しないと、だまされたり引っ掛けられたり、ろくな事にはならないぞ、と警戒する。

アメリカのビジネスでは、まった『韓非子』である。

マキアベリ』の君主論と同じ考えである。

現代のビジネスでは、性善説だけでも通用しないし、性悪説だけでも通用しないし。

あくまで組織論においての活用、人間心理の原則として応用するには、おもしろい学問である。

人間を動かしている動機は何か。

愛情でもない、思いやりでもない、義理でも人情でもない、ただ一つ、利益である。

人間は利益によって動く動物である、というのが『韓非子』の認識であった。

彼は、こう言っている。

鰻は蛇に似ているし、蚕は芋虫に似ている。だれでも、蛇を見れば飛びあがり、芋虫を見ればぞっとする。だが女性は蚕を手でつまみ、漁師は鰻を手握る。利益があるとなれば、誰でも怖さを忘れて勇者に変身するのだ。」当然、人間にはそれぞれの立場というものがある。

君主には君主の立場、臣下には臣下の立場がある。

それぞれの立場に応じて、おのずから追求する利益も異なってくると韓非子は考えた。

それぞれ追求する利益が異なる以上、頭から相手を信頼してかかるのは、取り返しのつかぬ失敗を招く恐れがある。しよせん、他人は信頼できない、頼りになるのは、自分以外にないのだ。

相手に背かないことに期待をかけるのではなく、背こうにも背けないような態勢をつくりあげる。相手がペテンを使わないことに期待をかけるのではなく、使おうにも使えないような態勢をつくりあげる。」

人間に絶望している訳ではない。いっさいの固定観念や希望的観測を捨て去って、人間の現実をあるがままに見すえようとしている。その眼は、おそろしく覚めているのである。